

平成6年度赤潮貝毒監視事業（赤潮調査：抄録）

酒井 基介・湯浅 明彦・牧野 賢治

目 的

本事業は、瀬戸内海関係 12 府県が参加し、赤潮の多発期に海洋調査を実施して、赤潮の発生予察手法の確立を図るとともに、漁業被害の未然防止と軽減対策に資することを目的として、昭和 51 年度から継続実施中の事業である。

平成 6 年度における播磨灘南部海域での気象・海象およびプランクトンの出現動向についてまとめたので報告する。なお、詳細については、「平成 6 年度赤潮貝毒監視事業報告書（赤潮調査）」を参照されたい。

1. 気 象

梅雨は平年より 14 日はやい 7 月 2 日にあけ、今年の梅雨期間の降水量は過去最少を記録し、その後も少雨で推移した。気温は、記録的な高温となり、高温（長期）・少雨（長期）で推移した。

台風は 7 月下旬と 8 月中旬に接近し荒天となった。

2. 海 象

水温：表層、底層ともに高水温で推移し、表層で 29 以上、底層で 27 以上に達した。

塩分：表層、底層ともにほとんどの期間で 32 以上と高く推移した。また、西よりの調査点では、他の調査点に比べて低い傾向があった。

栄養塩（ $\mu\text{g-at}/\ell$ ）：窒素、リン、珪酸塩のいずれも 7 月中旬から 8 月上旬にかけて低かった。

3. プランクトン

採水法での優占種は、沖合、沿岸ともにほとんどの期間で珪藻であった。沖合では、7 月下旬から 8 月初めにかけて *Gymnodinium mikimotoi* が優占した。*Chattonella* の最高出現数は 0.49cells/ml で、前年に比べてかなり少なめで推移した。一方、*G.mikimotoi* の最高出現数は、沖合での 142cells/ml であった。

ネット採集による優占種は、6 月下旬～7 月上旬までは、*Noctiluca*, *Copepoda* で沈澱量も少なかったが、7 月中旬以降は、優占種が珪藻類へと変わり、沈澱量も増加した。